39. 創造性 Creativity

あなたの狂気、あなたの否定性、あなたの破壊性を、あなた自身とほかの人に対して用いるのをやめなさい。それはこれまでやりやすいことだったのです。破壊なら、子どもにもできます。いまはもう、内側にあってまった

これは仏陀のことを語った物語だ。
ほとんど狂っている人がいた。狂っている殺人者だ。彼は千人の人びとを殺すという誓いをたてていた、社会が彼をひどく扱ったから、それ以下ではだめだった。千人の人びとを殺すことで、彼は復讐するつもりだった。そ
彼は九百九十九人の人びとを殺した。アングリマーラが近くにいることを知ると、人びとは誰もその方角には行かなかった。人の往来が止まったものだ。そして、彼には最後の人間を見つけるのがとてもむずかしくなってい

仏陀は森に向かっていた。すると村から人びとが彼のところに来て言った。「行ってはいけません！ あそこにはアングリマーラが、あの狂った人殺しがいます！ 彼は思い直したりはしません、あっさりと殺してしまうので
だが仏陀は言った。「もし私が行かなかったら、誰が行く？……彼は人間だ。彼には私が必要だ。私は危険を冒(おか)さなければならない。彼が私を殺すか、それとも私が彼を殺すかだ」

仏陀は行った。最後の最後まで彼といっしょにいると言っていた彼のもっとも近い弟子たちでさえ、あとずさりし始めた。これは危なかった！
だから、アングリマーラが岩の上に坐っている、その丘に仏陀が近づいたときには、彼の後ろには誰もいなかった。彼は独りだった。弟子たちは消えていた。

アングリマーラは、この無垢で、子どものような人を見た。あまりにも美しかったので、殺人者である彼ですらその人に慈悲を感じた。
彼は考えた。「この人は私がここにいることにまったく気づいていないようだ。そうでなければ誰もこの道を通っては来ない」。さらに彼は考えた。「この人を殺すのは良くない。彼を行かせることにしよう、誰かほかの人
彼は仏陀に向かって叫んだ。「戻れ！ いまそこで止まって戻るんだ！ それ以上足を踏み出してはだめだ！ 私はアングリマーラだ。
それに、見ろ、ここには九百九十九本の指がある。あと一本の指が必要なんだ――たとえ私の母が来ようとも、私は彼女を殺して自分の誓いを成就させる！ だから近づいてはいけない。私は危険だ！ それに私は宗教な

そこでアングリマーラは考えた。「こいつは耳が聞こえないか、狂っているかだ」もう一度彼は叫んだ。「止まれ！ 動くな！」
仏陀は言った。「私はずっと前に止まった。私は動いていない。アングリマーラ、お前は動いている。私にはゴールはない……それに、動機がなければ、どうして動きが起こりえよう？ おまえが動いているのだ――
アングリマーラは笑い出して言った。「お前はほんとうにばかか、狂っているかだ。お前がどんな礼儀を心得ているのか私にはわからない！」仏陀は近づいて言った。「お前にはもう一本の指が必要だと私は聞いた。この

アングリマーラは言った。「私はこのあたりでは自分だけが気違いだと思っていた。が、賢くあろうとはしないことだ。それでも私はお前を殺すことができる」仏陀は言った。「私を殺す前に、ひとつのことをやってほし
仏陀は言った。「もうひとつだけ――それをもう一度樹につけてほしい」
アングリマーラは言った。「お前が完全に狂っていることがもう私にはわかった。私は切ることはできるが、つなぐことはできない」
すると仏陀は笑い始めて言った。「壊すだけで創ることができないなら……お前は壊すべきではない。破壊は子どもでもできる、それには少しも勇ましいところはない。この枝は子どもでも切れる。だがそれをつなぐに

アングリマーラは目を閉じて言った。「その道に私を導いてください」。そして、その一瞬のうちに、彼は光明を得たと言われている。

気違いになるエネルギーをもっている人は、光明を得るエネルギーももっている――それは同じエネルギーだ。向きが変わっただけだ。
あなたが創造的になれなかったら、エネルギーは破壊的になる。
THE MUSTARD SEED, pp.137-142

Revision #4
Created 5 October 2024 08:07:35 by ゆう
Updated 25 October 2024 02:44:37 by ゆう